

## オルガノン要約 § 63～§ 70

§ 63 一次作用：ポータンタイズされたレメディーが最初にかかる健康状態の変化。生命エネルギーよりもレメディーのエネルギーの方がやや強い。

二次作用：レメディーのエネルギーとは反対の方向に自分の力を向けようとする生命エネルギーの努力。生命維持のために働く自動的な活動。

§ 64 生命エネルギーはまるで無理やりに外部からの人為的なエネルギー（レメディー）を受け入れ、自分の状態を変化させる。次に自分をいわば再び奮起させる。それには二通りの状態がある。

A) 一次作用と反対の状態を生み出す場合。（逆作用・二次作用）

B) 一次作用と反対の状態を生み出さない場合。レメディーによって生まれた変化を消し去ることによって自分の優位性を発揮しようとしている。そして本来やるべきことに生命エネルギーは再びとりかかる。（二次作用・治癒作用）

§ 65 A について：一次作用と二次作用の例。

薬を大量に投与すると、生命エネルギーは一次作用と反対の状態（二次作用）を常に必ず生み出す。

§ 66 普通、レメディー投与後の二次作用を健康な身体に認めることはできない。二次作用は正常な状態に回復するのに必要なだけの逆作用しか生じないから。

§ 67 § 66 からホメオパシーによる有益な治癒の経過が明らかになる一方、アンティパシーが本末転倒であることも明白である。

（注）救急医療の意義：

アンティパシーは極めて急を要するときにだけ有効である。救急的に死が迫っているときはレメディーの反応を待つことはできない。緩和剤や解毒剤などを用いて、いったん蘇生させなければならない。蘇生したら生きている器官は健康な経過をたどり始める。生命エネルギーは健康であり、その活動を阻害も抑圧もされていないからである。

§ 68 レメディーは非常に微量であるので、治療後にレメディーの影響が残っていてもすぐに消える。生命エネルギーは病的な攪乱が消滅した後はあまり努力する必要がない。

§ 69 薬による反対の症状によって病気を根絶しようとするが、それは不可能で、わずかな期間だけその症状を根源的生命に気づかれないようにするだけである。その後薬の症状と逆の状態を強制的に生じさせる。これは根絶されずに残った自然の病気による攪乱状態ともいえ、必然的に激しくなり大きくなる。

薬による反対の症状は、病気によって攪乱された身体の場所を占拠することができない。  
つまり緩和剤はその作用が終息した後にいっそう症状が悪化し、投与量が多くなるほどますます悪化する。

(注 1) 感覚器官や印象に持続的な「相殺」は起こらない。

(注 2) 二次作用を起こすのは薬ではなく、常に生命エネルギーが生み出すものである。

## § 70 ここまで (§ 1～§ 70) のまとめ

- ・ 治癒すべきもの：患者の状態の変化の総体においてのみ存在する。
- ・ 薬の治癒力の本分は、病気の症状をその元から刺激すること。
- ・ 薬の治癒力はプルーベングによって知ることができる。
- ・ 薬の症状と類似していない病気を治癒することは決してできない（アロパシー）。
- ・ 反対の症状を生み出す薬（アンティパシー）で緩和できるのは一次的であり、慢性的な重い病気を治癒することには全く適さない。
- ・ ホメオパシー：症状の総体に対してできる限り類似した症状を生み出すことができる薬を適量使用する。生命エネルギーへの類似した攪乱によって症状は必ず永遠に消滅する。